

フレッシュな学園もののミステリはいかが？

2018年12月

眞鍋由比

今年の1冊をドリアン助川『**あん**』 2015ポプラ文庫 にしたのは「はと時計12月号」に載せたのでそちらもご覧下さい。

1996年（平成8）にやっと「らい予防法」が廃止されハンセン病は普通の病気として一般医療機関で診療されることになったことも小説には描かれています。現在でもハンセン病に対する誤った知識があり、偏見・差別は解消されていません。人権が無視されてきた歴史がいまだに存在し、苦しんでいる人がいることを知っておいてほしいと思います。

さて先月、とある先生に高校生だけど初心者向けの推理小説を紹介してほしいと依頼がありました。湊かなえ『少女』や東野圭吾『容疑者Xの献身』、米澤穂信『水菓』、ピエール・ルメートル『その女アレックス』などいろいろとおススメしたのですが、今回私のイチオシのフレッシュな翻訳ものはカレン・M・マクマナス

『誰かが嘘をついている』 2018創元推理文庫。

放課後の理科室で居残りさせられた5人の生徒。携帯を授業に持ち込んではいけないことは知っていたのに、誰かが私のカバンに携帯を！ハメられた？と悩むブロンウィン。生徒五人のうちの一人が急に苦しみだして救急車で搬送され、病院で死亡する。

残った四人の生徒はいずれも死んだサイモンに弱みを握られていた…。彼は自作のアプリでいつも誰かのスキャンダルを暴露して、学校のさらし者にしてきた。不思議なことにそのスキャンダルはいつも事実のようで、暴露された生徒はみな彼を恨んでいたし、そうでない生徒はいつ自分の秘密がバラされるのか、戦々恐々だった。

残された4人、優等生のブロンウィン、元ドラッグの売人ネイト、野球部のエース・クーパー、学校のプリンセス・アディがそれぞれの立場で語っていく殺人事件はネットやテレビも巻き込んで国中の注目する大事件になっていく。

自分の妹と自分のしてしまった過ちを守りたいブロンウィン、母に捨てられ父は育児放棄で犯罪を手を染めないと生活できないネイト、誰よりも努力して野球の推薦入学をとりつきたいクーパーは誰にも、特に父にだけは知られたくない秘密が。そしていつも輝いている、生徒の憧れの美少女アディも絶対に知られたくない秘密を知られることを恐れていた。

それぞれの生徒の気持ちが手に取るように書かれていて、章ごとに語り手が変わるのもむしろ楽しめます。特に優等生のブロンウィンが男気のある不良ネイトにひかれていく過程にはかなり説得力が！恋愛、勉強、スポーツ、友情、家族の問題、性的嗜好など思春期の悩みをビビッドに描きながら、警察の不当逮捕に抗うように生徒たちは結束していく。

結末は、ミステリー好きなら予想できなくもないけど、禁じ手ぎりぎりかなと思います。うまくできている。伏線は確かにありました。

今の高校生なら共感できるのではないかな。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスでもベストセラー、続編の待機中のミステリ、いかがですか。

